

# やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	21 / 2007 / 21-27
タイトル	《雪形探訪Ⅳ》青森県の山々に多彩な雪形
著者名	室谷洋司

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

《ふるさと雪形探訪Ⅳ》

青森県の山々に多彩な雪形

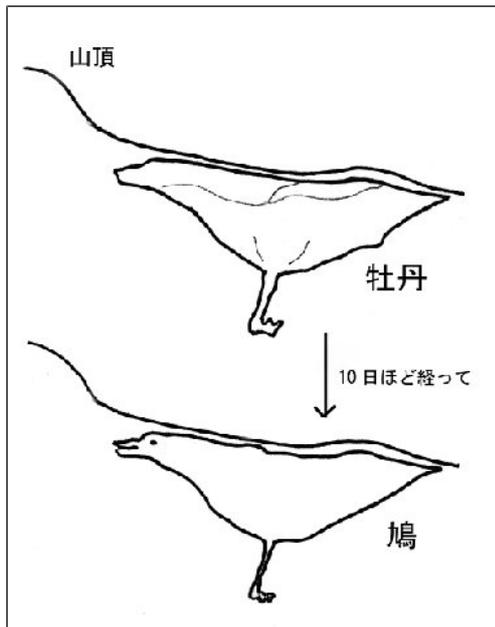
第10代 室谷洋司



[写真1] むつ市街から見た釜臥山。ドームがある山頂から右下の、くぼんだ所から下が「牡丹」の雪形。今では電波基地の山だが、昔から季節の情報を送り続けてきた(2001年4月18日、佐々木三男氏撮影)



[写真2] 山頂部のアップ。「牡丹」はやがて「鳩」になる(4月26日)



[図1] 雪形を示すイラスト

1. 下北半島釜臥山と津軽半島増川岳

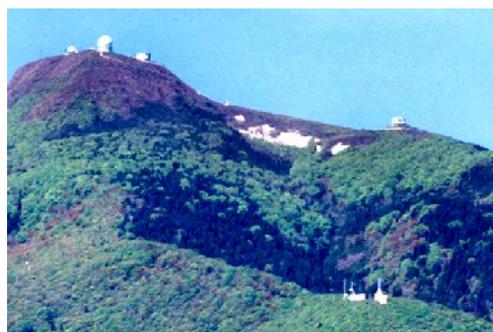
ふるさとの山があるということは幸せである。下北半島の釜臥山は、海拔は879mに過ぎないがよく目立ち、下北半島のシンボルだ。

民俗伝承を探ると、この釜臥山にも雪形が現れる。菅江真澄は日記「月のおろちね」(文化9年、1812年)で、釜臥山に「牡丹」が出ると記し、また「釜臥山の右下に当たる沢の残雪が『三つ星』になるとイワシがとれる時期が近い。」(品川弥千江、「岩木山」、1968年)とか、「むつ市史・民俗編」(1986年)には、「田名部では昔、釜臥山の山頂から少し下のかげになった所に残る雪の形状によって、大豆の種まきに取り掛かっていた。見る位置によって、例えば小川町ではハトの形に見える。」などとある。

雪形の確認と撮影は年に2、3か月間に限られ、釜臥山になかなか順番が回ってこなかった。2001年は思い立って、むつ市在住の写真家・佐々木三男氏に釜臥山ウォッチングをお願いした。同氏が撮影した4月から5月下旬までの一連の写真を仔細に眺めて見たが、なかなか雪形が浮かび上がってこない。

釜臥山 「牡丹」から「鳩」に変わる

現地で見るのが基本だ。翌2002年は雪消えが早く、晴天になった4月28日に下北行きを決行した。2年続きで何度かやってきたがこの日が最高の条件。釜臥山は青空をバックに山肌を克明に見せていた。頂上から山腹



[写真3] 山頂部の右下は最後まで消え残り、「三つ星」へと変わっていく(5月20日)

まで何度も目でなで回したが、これといった形が浮かんでこない。周囲から雑念を振り払おうと市街地から斗南ヶ丘の高所に移動した。

乾ききった枯れ草を尻に敷いて山肌を飽くことなくじっと眺めた。山頂右下の沢にできた陰影が面白い。釜臥山の場合、そんなに谷が方々に深く彫り込まれていない。雪のある面積もそんなに広くはないし、見る角度も限られている。

「牡丹」だ!「鳩」だ! この年はすでに消えてしまったが、山肌そのものからそれらが読めるではないか。稜線から谷底にかけて上部は厚く下部は薄い残雪が認められる。下が茎でその上に大輪の白い牡丹が咲いている。

「牡丹」はだんだん薄れ、10日もすると左側の花びらの先が二つに割れてくちばしになる。ポツカリと目玉が黒く開いて陸奥湾の方を向いたふくよかな「鳩」の出現である。

この雪形が現れるともう霜の心配もないことから、農家の人たちは豆蒔きの準備や種蒔きにとりかかったのだろう。豆はハトの好物で、せっかく蒔いても食べられてしまうのに、昔の人たちのおおらかさが微笑ましい。

### 増川岳 「馬」は「ガラ」とも呼ばれる

津軽半島では、内田邦彦が「津軽口碑集」(1928年)に、「津軽平野の北方に増川岳あり。北麓には馬の田かき時となれば、残雪が田かく馬の様に見ゆ。(大川平の人)」と増川岳の「馬」を紹介している。

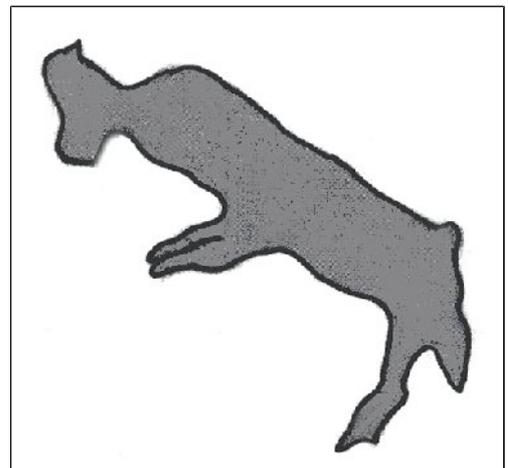
2002年は3月に入ってから、今別町大川平の田園を歩いた。増川岳は海拔714mに過ぎないが、当地方ではもともと貫禄がある。山容は平たい台形をしていて、なだらかな五つの峰がある。左から数えて四つ目と五つ目の間のすぐ右下に逆三角形の残雪部があり、その中にくつきりと左上を向いた「馬」が黒く確認できた。

あたりを見ると4、5人の農家のひとが田の畦をつくらっていた。「増川岳について教えてください」とやりとりが始まった。年寄りから聞いたこととして、あの残雪は「ガラ」と呼んでいて農業、漁業、釣り人、山菜採りなど、それぞれに仕事の段取りを教えてくれるという。

増川岳の「馬」は、今では「ガラ」と呼び名を変えて季節の情報をもたらしているのである。



[写真4] 今別町大川平から見た増川岳で「馬」の雪形が現れた。今のひとは「ガラ」と呼ぶ(2002年3月31日)



[図2] 雪形を示すイラスト

## 2. 岩木山の「鯉の滝上り」と「四つ目(マナグ)」

岩木山は日本一の雪形が棲む山として本誌第20号(2006年)に紹介した。そこでは「動物絵図」とか「農事暦」として津軽一円の人びとに農作業の疲れを癒したり、耕作の手順を教えてくれた。

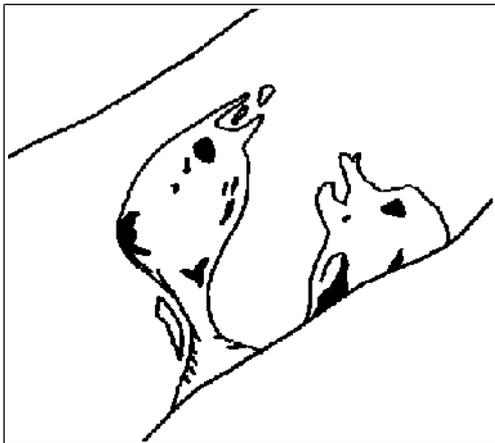
ところが岩木山には、まだまだ形が変わった雪形がごく一部の地域のかたがたに微笑みかけてくれるのである。



[写真 5] 南側から眺めた岩木山。「鯉」を発見する前年に無意識で撮影していたが、後でよく調べたら左側稜線下に「鯉の滝上り」が鮮明に写っていた(2001年5月13日、弘前市相馬地区)



[写真 6] 国吉、高野地区からは眼前に躍動感たっぷりの2匹の鯉(2002年4月24日)



[図 3] 雪形を示すイラスト



[写真 7] 2匹の鯉は、半月たつと骨ばかりの消え残りに(2002年5月12日)

### 弘前市国吉 五月空に「鯉の滝上り」

「岳の人から『鯉の滝上り』が出ますよ!」—10数年前に津軽の田園地帯で聞き込み調査をしていたとき、このような話しを聞いて、それが頭から離れることがなかった。

岩木山の雪形を調べていて、動物の雪形は各地で見られ、多くは家畜の牛や馬で鳥も多い。ところが魚はまだだった。「鯉」を教えてくれた人は又聞きで、岩木山の何処に何時出現するのか、また何処から眺められるのかは、いっさい分からないと言う。雪形調査ではよくあることで、最初の難関である。

「鯉の滝上り」は頭の引き出しに仕舞い込んでおいた。それが、まったく偶然に向こうから飛び込んできたのである。

2002年4月から、白神山地の尾太岳に「馬」の雪形が出るという情報があり、これに挑んでいた。調査初日の21日は山頂付近が厚く雲に閉ざされ、早々の退散となった。西目屋村砂子瀬で迎えのタクシーに乗り弘前駅に向かったが、途中、弘前～西目屋線の道路工事で片側ストップ。何気なく左手の岩木山に目をやると、突然「鯉」が飛び込んできたのである。このときばかりは工事に感謝して、夢中でシャッターを切ったが、山はうっすらと曇りモノにはならない。付け加えると、このようなチャンスは車を運転している人には訪れないとも思った。

3日後に再度挑戦。目指すところは弘前市国吉地区周辺であるが、せっかくの機会を逃すまいとこの沿線を全部調べることにした。岩木山南側にあたる岩木川源流の山あいには、山の中腹から頂上まで見通せる場所は数か所しかない。

一番奥まった西目屋村村市から始めた。「鯉」は見えない。つぎの田代でも見えない。この2か所は、岩木山をほぼ真南からみているが、国吉からとは山容がまったく違う。距離にしてほんの六キロほどだが、岩木山のふもとを曲線を描くように回り込んでいることから、形状の変化はきわめて大きい。

調査の結果からお勧めの眺望点は国吉、高野の両地区ということが分かった。岩木山の無数の沢から流れ落ちる水は大秋川になり、それが合流する岩木川の谷あいから岩木山がよく見える。開けたところでは丘陵斜面にリング園や田園、畑が作られ、その向こうの山腹に2匹の

鯉が滝の水しぶきを振り払うように飛び上がり躍る。今まで見た雪形で「鯉の滝上り」は、もっともリアルで躍動的なものであった。尾太岳の「馬」は逃がしてしまったが、それに勝る釣果となった。

### 田植え前の農作業を教える

この年は4月に入って異常高温が続いた。岩木山の雪解けは急速に進み、まわりの風景は、里のソメイヨシノは満開を過ぎ、渓谷地帯は広葉樹が芽吹きピンク色の鮮やかなオオヤマザクラが咲き始めていた。

一方、「鯉」が出現する岩木山山腹は海拔が低く、岩場になっている。その複雑なくぼみに雪がひばりついて、鯉をかたち作っていることが分かった。まわりの尾根筋は、ブナの新緑が日に日に瑞々しさを増していた。まさに「山笑う季節」に「鯉」が飛び跳ねていたのである。まわりの植生が見せる季節の衣裳からすると、平年であればゴールデンウィークの中間あたりに相当する。

家並のあちこちに子供の日を祝う鯉のぼりが、5月の風にはためいているこのとき。互いのタイミングの良さに感心し、飽くことなく山の鯉を眺めた。

地元のかたがたから、雪形が教える暦としての具体的な役割は聞けなかったが、予測されることは、「鯉の滝上り」は形状の変わり身が早く、輪郭の出始めから、目玉がクッキリと出た完成期、そして徐々に崩れて骨になる状況が明瞭に分かる。これらから田起こし、水入れ、田搔きなどと、田植え直前の一連の作業に役立てたものと推測される。

### 弘前市鬼沢 「四つ目(マナグ)」

これからめざすところは、岩木山の津軽平野寄りの裾野で海拔わずか100m地点。こんなところに雪形が？誰もが首をかしげ信じがたいが、品川弥千江の著書「岩木山」(1968年)に、裾野に生きた人々の次のような民俗伝承がある。

「十腰内の奈良寛池付近に出る『四つ目』(俗に四つマナグ)という残雪も農耕に関係あると古老が言っていた」とし、本書には写真も掲げられている。

津軽のことばで「目」を「マナグ」という。溜池の岩木山寄りに丸い残雪が4か所に残ると、すなわち「四つマナ



[写真 8] 渓谷は新緑の「山笑う季節」。オオヤマザクラが満開(2002年4月21日、砂子瀬)



[写真 9] 岩木山の裾野にある奈良寛池。沢の水を溜めて付近の農地の灌漑用水とした(2002年4月6日)



[写真 10] 1962年から国営開発事業が始まり、裾野一帯が一変した(1967年6月撮影)



[写真 11] 岩木山の名蝶と言われたオオルリシジミ: 青森県レッドデータ絶滅種(1969年6月撮影)

グ」。この雪形は、長い間、気になっていたが調査の機会がなかなかやっとなかった。ほかの仕事との兼ね合いもあるが、もうひとつ大きな理由があった。

奈良寛池周辺は、私にとって青春時代の研究フィールドで、ここにはオオルリシジミという美しいチョウが生息し、全国的にも珍蝶として有名だった。1958年から10年間、その生態観察に没頭。ところが1962年に始まった国営の「青森県岩木山麓開拓事業」で、一帯の5000ヘクタール余りが一大農業地に変貌。オオルリシジミの生息地は消滅し、「青森県レッドデータブック」(2000年)のチョウの部で唯一の絶滅種とランクづけされてしまった。

ここに往時の風景を探すことは無理ではないか。したがって「四つマナグ」も生き残れたかどうかは、はなはだ疑わしい。

### 変わり果てた高原に雪形が生き延びる

2002年4月6日、長年のわだかまりにケリをつけることにした。数10年ぶりの奈良寛池は、舗装された農道を行くとすぐ見えてきた。かつての一面の草原はリンゴ園に変わり、岩木山だけがそのままの姿で輝いていた。

「おはようございます。何の作業をしているんですか?」。女の人が手を休めて、リンゴの樹皮を剥いで、腐乱病に犯されていないか一本一本調べていると答える。

「雪が4か所残っている、四つ目って知っていますか?」。怪訝そうに、「それって何ですか?」。

昔の写真を見せて、これは昭和40年のここです。—「わたし、生まれたばかりで分かりません。」

しまった! 女たちは笠をかぶり手ぬぐいで顔を被っている。覆面からは年齢が分からないのだ。ゴメンナサイ!

手配写真と周りの風景を見比べながら、探すことにした。年輩の男のひとが剪定した枝を、園地のあちこちで燃やしている。



[写真12] 約40年前の奈良寛池(左下)と広々とした草原。池の岩木山寄り斜面に4か所の雪が消え残り、これを「四つ目(マナグ)」と呼んだ(品川弥千江著「岩木山」から)



[写真13] 同角度の写真。リンゴ園や針葉樹に覆われ、左手下にかすかに池が見える。同位置に「四つ目」が残っていた(4月6日)

「4か所の雪が残るところありますか?」「????」。「四つマナグってありますか?」。今度は、にっこり。「あるある、分かる分かる」。鬼沢地区に住むNさんは大正10年生まれで、こどもの頃に爺さん婆さんから聞かされ、これを見ながら農作業をやったと言う。

まさかと思っていた「四つマナグ」が生きていた。高台へ高台へと山道を急いだ。かつて草原であった斜面には木々が高く伸びて、溜池が見通せない。ぽつかりと岩木山方向に開けた場所があった。あった! 「四つマナグ」だ。戦後間もなく植えられたカラマツ林のなかに、4か所の雪の消え残りが見えた。

資料をあたっていくと、岩木山には前に紹介した「苗モッコ」のほか、「鋤(スキ)」とか「鍬(クワ)」、「股鍬(マダグワ)」といった農具の雪形も知られる。しかし聞き取り調査では今では見えないという。多くは岩木山の裾野に接した低い所にみられ、そのような場所は森林伐採や開発が進み、雪形のすみかが失われてしまったのである。



[写真 14] 疾走する「山羊」または「犬」(2001年5月29日、高屋)



[写真 15] 見る場所を変えると、「山羊」「犬」はおっとりした姿で口を開けている(2001年5月29日、湯口)

春一番に咲く黄色いキブシの花穂が伸びきり、田打ち桜(コブシ)が咲き始めていた。「四つ目」はひっそりと畑仕事の始まりを告げていたのだ。日本一低所にある雪形よ、永遠に。そうつぶやきながら、裾野を後にした。

### 3. 魂が雪形になって山に籠もる

「お岩木さん」と親しまれている岩木山や県内の山々の雪形を探訪してきた。それには写真や見方を示すイラストを添えたりしたが、読者には、これが「ツバメ?」などと首をひねるむきも多かったと思う。質問やこんな雪形を見つけました、と言ったお便りもいただいた。

例えば「ツバメ」について、「私は山羊さんと見ているのですが」と一。確かに山羊さんと見立てる人や、犬と呼んでいる所もある。

岩木山は独立峰で周囲

4分の3以上の人里が観客席。「ツバメ」の雪形は板柳町から弘前市中心部だとそう見えるが、だんだん南に行くにしたがって、「山羊」とか「犬」に見え、さらには「牛クビ」と「ダイコン」の組み合わせになる。

今回のシリーズでは、鶴田町から鱒ヶ沢町にかけて、岩木山の北側あるいは西側からの雪形は紹介できなかったが、これは調査が不十分ということもあり申し訳ないと思っている。友人の菊池幸夫さん(平川市在住)から、西海岸をドライブしていたら北金ヶ沢付近で「タマちゃん」を撮りましたよ、と写真を送ってきた。愛嬌たっぷりの雪形で、岩木山の姿かたちも土地の人でなければ拝めない変わりようである。また、鱒ヶ沢町周辺を取材していたら、「十字架」と思えるような雪形を見つけ、思わずシャッターを切った。

弘前市の方からは、「種蒔爺をなぜ紹介しないの!」と言うお叱りもいただいた。ただ、農家の古老の話では、残雪を部分的に見た「苗とり爺」「苗シヨイ婆」(本誌前号で紹介)の微妙な変化の方が農作業に役立つとし、優先させた。

#### 雪形を四つに区分

岩木山は雪形日本一と言われるだけあって、それぞれ



[写真 16] 真ん中の峰に「タマちゃん」のあどけない顔(2005年4月18日、北金ヶ沢、菊池幸夫氏撮影)



[写真 17] 頂上から右下下に白い「十字架」がクッキリ(2001年5月13日、鱒ヶ沢港)



[写真 18] 岩木山の残雪は5月に入ると急速に分離し、中央に「種蒔爺」が出現。スゲ笠をかぶり両手を広げる優美な姿は「早乙女」にも見える(2001年5月13日、常盤坂)

の人里に伝えられてきたさまざまな雪形が、雪消えの季節に形を競い合う。その意味合いから、次の四つに区別できると思う。

- ①正真正銘の雪形で、しっかりした伝承がある。農事、山仕事、漁業の重要な目安。
- ②形が明快で実質的な用途はないが、その土地に親しまれ日常の話題に。
- ③残雪の形状が山名の由来。
- ④生業の指針とは無縁のニューフェイス。

このようにして見ると、「苗モッコ」(本誌前号で紹介)などは形が地味だが①の代表格で、「タマちゃん」とか「十字架」などは④のニューフェイスの要素をもつものであろう。

全国の雪形を「山の紋章・雪形」(1981年)として世に紹介した田淵行男は、同書のなかで、「遠い祖先の精緻な眼差を語りつぐ、郷土の自然暦—雪形」とか「雪深い山国の歴史を運び続ける、山の紋章—雪形」と詠い上げている。共感を呼ぶ言葉である。そして私たちは、この故郷の自然遺産をこの先、どのように活用していったら良いのだろうか。

私見として、

- ①生活用水、農業用水が十分かどうか。
- ②山菜など「山の幸」の適期を察知。
- ③衣替えなど初夏までの季節の移り変わりを実感。
- ④観光資源。
- ⑤やすらぎを得る。
- ⑥地球温暖化の指標、

などが思い浮かぶ。



【図4】祖先の魂が山に籠もり雪形になって子孫の幸せを願う。秋のお山参詣は祖先への懺悔、感謝です。(小館衷三氏談、山口晴温・画)

## 今日的な雪形の活用

観光資源としての活用は、岩木山の雪形日本一の冠をフルにPRしたい。八甲田山などでは、雪形のきわめてリアルな姿かたちが共感を呼ぶことだろう。長野県など日本アルプスを望むところでは「雪形ウォッチング・ツアー」などを企画して首都圏から客を呼んでいる。

雪形の定点観測から地球温暖化の動向を探ることは今日的なテーマであろう。

岩木山の「山羊さん」を指摘してくれた弘前市のTさんは、「かくも迅く若草色の駆けあがり、雪の山羊さん痩せゆく岩木嶺」を添えてくれた。季節感そのものである。

20数年前に雪形を調べ始めたころ、岩木山信仰の研究者・小館衷三氏は、「岩木山には亡くなった人、祖先の魂が籠もっています。そして子孫よ、こういう時期になったよと雪になって教えている。秋のお山参詣も祖先への懺悔、感謝するということです。」と筆者に語ってくれた。

年ごとの春に、故郷の山から微笑みかける雪形。それは遠く祖先から、ずっと子々孫々にまで同じ思いを育ませてくれる、かけがえのない季節の贈り物なのである。(完) (2006年12月10日記)

## 引用文献

- |       |       |               |
|-------|-------|---------------|
| 菅江真澄  | 1812、 | 「月のおろちね」。     |
| 内田邦彦  | 1928、 | 「津軽口碑集」。      |
| 品川弥千江 | 1968、 | 「岩木山」。        |
| むつ市   | 1986、 | 「むつ市史・民俗編」。   |
| 青森県   | 2000、 | 青森県レッドデータブック。 |
| 田淵行男  | 1981、 | 山の紋章・雪形。      |